

図書館の本の貸し出しも終わり、朝の読書等でも活用して欲しいと思い、いくつか先輩等から紹介していただいたお話しを紹介します。活用できる方は活用してみてください。

## 『何もない、なんて言わせない』

いつもよく働く靴屋のもとへ、あるとき、天使が現われました。物乞いの姿になって…。靴屋は物乞いの姿を見ると、うんざりしたように言いました。

「おまえが何をしにきたかわかるさ。しかしね、私は朝から晩まで働いているのに、家族を養っていく金にも困っている身分だ。ワシは何も持っていないよ。ワシの持っているものは二束三文のガラクタばかりだ」そして、嘆くように、こうつぶやくのでした。

「みんなそうだ、こんなワシに何かをくれ、くれと言う。そして、いままで、ワシに何かをくれた人など、いやしない…」物乞いは、その言葉を聞くと答えました。

「じゃあ、わたしがあなたに何かをあげましょう。お金にこまっているのならお金をあげましょうか。いくらほしいのですか。言ってください」靴屋は、面白いジョークだと思い、笑って答えました。「ああ、そうだね。じゃ、100万円くれるかい」「そうですか、では、100万円差し上げましょう。ただし、条件が1つあります。

「100万円の代わりにあなたの足をわたしにください」「何!? 冗談じゃない! この足がなければ、立つことも歩くこともできやしないんだ。やなこと、たった100万円で足を売れるもんか」「わかりました。では、1000万円あげます。ただし、条件が1つあります。

「1000万円の代わりに、あなたの腕をわたしにください」「1000万円…!? この右腕がなければ、仕事もできなくなるし、可愛い子どもたちの頭もなでてやれなくなる。つまらんことを言うな。1000万円で、この腕売れるか!」「そうですか、じゃあ、1億円あげましょう。その代わりに、あなたの目をください」  
「1億円…!? この目がなければ、この世界の素晴らしい景色も、女房や子どもたちの顔も見ることができなくなる。駄目だ、駄目だ、1億円でこの目が売れるか!」すると、物乞いは言いました。

「そうですか。あなたはさっき、何も持っていないと言っていましたけれど、本当は、お金には代えられない価値あるものをいくつも持っているんですね。しかも、それらは全部もらったものでしょう…」靴屋は何も答えることができず、しばらく目を閉じ、考えこみました。そして、深くうなずくと、心にあたたかな風が吹いたように感じました。  
物乞いの姿は、どこにもありませんでした。

(文：中井俊巳)

図書館の本の貸し出しも終わり、朝の読書等でも活用して欲しいと思い、いくつか先輩等から紹介していただいたお話しを紹介しします。活用できる方は活用してみてください。

## 『父よ』

わたし ちち とし た かい き よわ さけ ちから か なに い おとこ  
私の父は、78歳で他界しました。気が弱く、酒の力を借りないと何も言えない男で  
た。酒とギャンブルに溺れて、いつも母に暴力をふるっていました。私は子供の頃から  
そんな父が大嫌いでした。父は腕のいい板前でしたが、一か所に落ち着かず全国の  
旅館や料亭を転々としていました。そんな暮らしを送っている時、叔父が、「いつまでも  
そんな生活をしていたら、妻や子供が、かわいそうだ」と言い、板前を辞めさせて地方  
公務員の職を見つけられました。

公務員といっても、仕事は養護施設孤児院の給食係でした。板前職人の父にとって  
は屈辱だったのでしょ。その頃から酒とギャンブルに溺れるようになったのです。

休日は朝から浴びるように酒を飲み、仕事の愚痴を溢してばかりいました。私が小  
学生から社会人になる頃までそんな生活が続き、案の定、肝臓を悪くして入退院を繰  
り返して78歳で他界しました。私は、父の葬儀で涙を流しませんでした。

葬儀の終わり頃になって、30歳代ぐらいの男女12～13人が、泣きながら焼香をして  
いるのに気づきました。初めてお会いする人たちなので、父との関係が全く解りませ  
ん。どうしても気になって仕方なかったので、出棺のときに、リーダーらしき青年に父と  
の関係聞きにいきました。すると、青年はゆっくり語ってくれました。彼らは父が勤めて  
いた孤児院で育った仲間だったので。「食べるものや着るものは、全国の人たちか  
らいただいたので何の不自由もありませんでした。一つだけ辛かったのは、学校にお弁  
当を持っていく時でした。いつも友達から離れたところで食べました。私たちのお弁  
当は、パンとミルクに決まっていたからです。友達はみんな、母親の手づくり弁当を楽しそ  
うに食べていました。だから、私たちはお弁当の日が一番悲しい日でした。梶山のおじ  
さんが来てくれてから、お弁当が変わりました。どこの母親にも負けないぐらい綺麗で  
美味しい手づくり弁当を持たせてくれました。その日から遠足やお弁当の日が待ち遠し  
くなり、友達に自慢げに見せながら、梶山のおじさんのお弁当をいただきました。あの  
時のお弁当の味を、20年経った今も忘れることはありません」

その話を聞いたとたん、涙が溢れて止まらなくなりました。  
あんなに大嫌いだった父親の姿がさっと消えて、小さい頃に一緒に遊んでくれた、笑っ  
ている父が走馬灯のように浮かんできました。それまで知らなかった父を知った喜びと、  
父を嫌って殆ど話さなかったことが無性に悔しく、大粒の涙になって溢れ出しました。

